

## 井上範博士追悼會

井上範博士が昨年傷ましき死を遂げられてから滿一年目の六月二十四日午後二時から東京帝大方面及民間知友關係の名士多數發起の下に、丸ノ内鐵道協會に於て盛大なる一周年追悼會を催された。當日は二階の來賓室に井上博士の生けるが如き大型寫眞をかざり御遺族列席の前にて參會者一同焼香署名をなし、別室大食堂に於て茶菓の饗あり、席上那波博士は發起人を代表して『本日は中山秀三郎博士が御支障の爲御出席出来なかつた』と一場のあいさつをされ、那波博士指名の内に多數の追悼談があり、互に故人の隠れたる人格と遺徳を偲びつゝ午後五時頃此の清き集まりを終つた。

當日の參會者は帝大方面、内務省方面、鐵道省方面、其他府市民間各方面の技術界の先輩名士百餘名に帝大土木科の學生も參列して非常な盛會であつた。追悼談の内

草間博士は故人が主任教授として細心の注意を拂つて卒業生の就職紹介に努められし點を語り。

中桐確太郎氏は京都の一燈園を代表して故人が一燈園の奉仕生活に入られし學者に珍らしき道念を地藏尊に例へて語られ。

本郷高德氏齊藤力氏及中根氏は故人が幼少時代から溫厚なる人物として友人間敬愛の中心であつた事を語り。

米山辰夫氏は同窓の一人として大學の卒業論文に橋梁の設計書に従來から豫算書を添付する事になつてゐるが、實際に即しない豫算等は無意味ですから止めやうと發議したが、故人は何うしても之に應じなかつたと語り。

中路誠三君は井上先生は困つてゐる學生があると自ら下宿を訪ねて見舞ひ、また物質的に援助もされてゐると其隱徳を語り。

庄野園六氏は故人が宗教的に道を求めてゐ

られた其敬虔なる態度に就いて同窓の親友としての交りの中に現はれた故人の人物を語り。

次いで故人の令弟から御遺族を代表してのあいさつがあつたが、最後に

高谷高一氏は昨年の東大土木科卒業生就職に對し井上博士が如何に心を勞されしかに就いて次の如く語つた。『卒業生のクラス會の席へ井上先生が御出になつて、平常から困つたと言ふ時によくされた様に、頭を押へて『君達は全く氣の毒だ』と言、全く困つたと言ふ様な顔付で申されました、其時三十餘人の卒業生中三人程しか就職は決定してゐませんでしたから、先生は非常に御心配になつてゐられたのでした。それが今日までには全部就職致してゐると言ふ事を御覽になつたら先生も何んなにか御悦びの事と思います。また在學中にクラス會を學生としては大袈裟すぎる程に計劃して先生の處へお誘に行きましたら『君達のクラスには斯んなに困つてゐる人があるのだよ』と言はれたので一同の者も其計劃を止めまして、以來クラス全體の者が其困つてゐる學生を卒業するまで共同援助するに至りました』等の談があつた。

記者も生前の井上博士に就いては餘り多くを知らなかつた廣井博士記念事業會に就いては井上博士も大に盡力され、記者は廣井博士傳記編輯の委託をうけてゐたので井上博士に度々御目にかゝり、また雜誌工事畫報の編輯上に就いても度々御指導なり、御盡力をうけたそれでも記者はあの不慮の死を遂げられた井上博士に就いては知る事が少かつた。井上先生の如き溫厚其物の如き學者は日を経るにつれて其隠れたる遺徳の大なる點が次第に現はれて來るものだと思ふ。

(昭和八年六月二十五日記)